



鹿中だより

鹿ノ台中学校

校長 三村明弘

平成 30 年 9 月 3 日

連日の猛暑日。西日本豪雨に追い打ちをかける局地的な豪雨、そして多発する台風。また、戦後 73 年と日航ジャンボ機の墜落事故から 33 年。様々な思いでこの夏を迎えた人たちの姿が放送されました。何とも言えないやるせない思いで、毎晩テレビを食い入るように見ていました。

そして 100 回記念の夏の甲子園での熱闘。酷暑の中、本当に最後の最後まで諦めない選手たちとスタンドで応援する人たちの「筋書きのないドラマ」がそこにあり、感動する素晴らしい試合ばかりでした。テレビに釘付けの人も多かったのではないのでしょうか。

夏休み前半に実施された県総体やコンクールでは、どの部も甲子園に負けにくいくらい熱く強い気持ちを持って練習に励み、競技し演奏してくれました。2 年生・1 年生のみなさんは 3 年生の先輩の示してくれた背中を引き継ぎ、来年に向かって一日一日を大切に練習に励んでください。勝負の世界ですから勝ち負けが生まれるのは当然です。優勝したからといって天狗になり、すぐ不平不満を顔に出し、人を非難してばかりの人より、たとえ 1 回戦負けでも仲間を大切に想い、いつも笑顔で自分の周りのすべての人への感謝の気持ちを忘れない人になってほしいと、心から願うばかりです。

『我以外皆我師』ですね。

二学期は、文化祭 9 月 14 日（金）、体育大会 10 月 6 日（土）、生徒会選挙 11 月 2 日（金）、3 年生芸術鑑賞会 11 月 9 日（金）、元水泳日本代表の千葉すずさんの教育講演会 11 月 12 日（月）など学校行事も多く、みなさんの主体的で自主的な活動が求められますが、自分の責任・役割を自覚し、協力し合い、今まで培った力を発揮してほしいと思います。

9 月に入ってもまだまだ暑い日が続きます。体調管理には十分気を付けてください。

※教職員の異動について

2 学期より、音楽科の本條博子先生に代わり、澤 春菜先生が育児休暇より復帰されます。また、校務員の吉村正俊さんに代わり、森田昌孝さんが着任されました。よろしくお願ひします。

『生きてるだけで丸儲け』

壮絶な人生を過ごしてきた明石家さんまさんだからこそ言える言葉なのかもしれません。明石家さんまさんが小学校高学年の時に父が再婚し、明石家さんまさんには年の離れた弟ができました。実は、明石家さんまさんの実母は3歳の時に病死していたのです。義母は、隣の部屋で酒を飲みながら「ウチの子はこの子（弟）だけや・・・」って言うのが壁伝いに聞こえてきて、いつも弟と二段ベッドで泣いていたそうです。義母は明石家さんまさんの事をずっと無視していて、まるで明石家さんまさんがそこにいないかのように弟にばかり話しかけていました。それでも明石家さんまさんは、義母に反応してもらいたい一心で、毎日必死に面白いことを考えました。そのうち、学校でもそのノリが良いと一躍人気者になり、そして、お笑いの道に進むようになったそうです。

明石家さんまさんは、弟の事を「チビ」と呼んでいました。

チビは高校時代、サッカー部のキャプテンでインターハイにも出場し、国体選手にも選ばれたほどの実力の持ち主だったそうです。しかし、19歳の時に焼身自殺？をしてしまいました。明石家さんまさんもサッカー好きなので、亡くなる前年には、「今度のワールド・カップをふたりで一緒に見に行こう」と約束していたそうです。「キップは僕が買っとくからって、約束しとったのに・・・。まだ納得できません、あのチビが死んだなんて・・・」「あいつは自殺するような人間やない。もし自殺するほど苦しんでいたら、僕にひとこと相談したはずや・・・」と泣きながら語りました。「家業を継ぐことに悩んでいた」と新聞記事には書かれていますが、真相は不明なままです。

1985年8月12日に起きた単独機としては世界最悪の犠牲者数520名を出した航空機墜落事故である日本航空 JAL 123 便墜落事故。明石家さんまさんは本来この便に搭乗する予定だったのです。当日、東京で「オレたちひょうきん族」の収録後、この便で大阪へ移動し、「ヤングタウン」に出演予定であったが、たまたま「オレたちひょうきん族」の収録が予定よりも早く終わったために、123便をキャンセルし、ひとつ前の便で大阪に向かったため事故を逃れました。事故当日の生放送のラジオレギュラー番組では、言葉を失うほどのショックを受け、番組をこの事故の報道番組に切り替えたそうです。

もし、収録が早く終わらなかったら・・・

キャンセルして早い便に乗らなかったら・・・

そう考えると、明石家さんまさんが「生きてるだけで丸儲け」と言っている本当の意味が分かります。

大切な家族2人、自分と同じ飛行機に乗るはずだった520人の分も生きている明石家さんまさんは、誰よりも命の重さを知っているのかもしれません。

常に『死』を意識して生きてきたさんまさんだけに、この「生きてるだけで丸儲け」という言葉にさまざまな思いを詰め「いまる」という名を付けたのではないのでしょうか。

「生きてるだけで丸儲け」。一見彼にぴったりのポジティブな名言であるように思えますが、その裏には様々な「死」を乗り越えてきた結果、彼が至った境地がその言葉に凝縮されています。

「日航機墜落事故とさんまの愛娘IMALU」より